



TITLE:

表紙ほか

AUTHOR(S):

CITATION:

表紙ほか. 霊長類研究所年報 1993, 23

ISSUE DATE:

1993-09-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/164509>

RIGHT:

靈長類研究所年報

VOL. 23

1993

**ANNUAL REPORTS OF THE
PRIMATE RESEARCH INSTITUTE
KYOTO UNIVERSITY**

創立25年を迎えた霊長類研究所

京都大学霊長類研究所

所 長 久保田 競

平成4年（1992年）は、昭和42年（1967年）に創立された霊長類研究所にとって記念すべき年になった。当初の計画が、昭和52年（1977年）に完了し、9部門2附属施設となってからは、国の財政事情が悪化して、現状維持の研究活動を強いられてきたが、創立25年を迎えた翌年の平成5年度になって、機構改革が認められ、4大部門10分野2附属施設となった。教官の定員増も実現した。25年の経験をバックにして、大きく飛躍できる年になった。

研究所の研究活動は、4つの部門（系統進化、社会生態、行動神経と分子生理）に整理統合できたし、大部門組織となって、今までの部門よりは目的指向の研究を大きな組織で行えるようになった。新しく生まれた分野（行動神経研究部門思考言語分野）では、類人猿を主たる研究対象とし、類人猿が示す高次の認知行動のメカニズム、及びそれと神経系との関係を調べるというたいへん魅力的でまた将来性のあるテーマを取り上げる。世界中の霊長類の研究機関で、恒久的な類人猿の研究施設を持っている所は無い。たいてい研究者一代で寿命を終えている。恒久的な類人猿施設が出来たのは世界で最初の事で、類人猿を含めた霊長類の研究での今後の展開は大いに期待できる。

昭和42年6月に研究所が創立されて、神経生理研究部門の助教授として赴任する事となった私は、同年9月に研究所建設予定地を初めて訪れた。小高い丘には松林が広がり、周りにある山地と同じ状態だった。どんな研究所に成長するか、当時見通す事はできなかった。やがて整地され、職員が集まり、建物ができ、サルも集められた。25年にわたる職員の努力で、部門が9つになり2つの附属施設ができ、研究棟、サル施設棟、放飼場などができ、世界的にみても優れた研究所に成長する事ができた。この間に日本霊長類学会が生まれ、また国際霊長類学会の大会を昭和49年（1974年）と平成3年（1991年）に名古屋に誘致し主催する事ができた。

今までの25年の成長期の後に来る25年は、成熟期であろう。今まで育った芽を大きく開花させて欲しい。この時期に21世紀を迎える。リンネがサルにPrimatesという名前をつけて、霊長類の科学的研究が始まったのが18世紀、いろんな分野へ霊長類研究が広がっていったのが19世紀、これらの研究成果がまとめられて、一つの学問体系となり、Primates（霊長類学）が生まれたのが20世紀である。来るべき21世紀は、霊長類学を飛躍的に成長させる世紀にすべきであろう。来世紀へ向かって、霊長類研究所は、なすべき課題を幾つも抱えている。類人猿を繁殖し飼育や研究を行うスペースと設備、スタッフが必要だし、まだ存在しないが必要な研究分野の設置も必要である。最近、霊長類を研究に使う事に反対する人たちが現れる様になったが、霊長類研究の意義や必要を国民に理解してもらう努力も今後必要である。

全職員が団結し、一致協力し、優れた研究所にして行こう。

目 次

I 研究所の概要

1. 組 織	1
2. 予 算 概 況	3
3. 図 書・資 料	3
4. 研 究 活 動	14
5. 人 事 異 動	50
6. 海 外 渡 航	50
7. 非 常 勤 講 師	52

II 共同利用研究

1. 概 要	53
2. 研 究 成 果	56
A. 計 画 研 究	56
B. 自 由 研 究	75
C. 資 料 提 供	91
3. 研 究 会	96

平成5年9月1日

発行所 京都大学霊長類研究所
〒484 愛媛県犬山市官林
☎0568-61-2891

編集 同研究所広報委員会
松沢哲郎・中村克樹
加納隆至・林 基治
平井啓久
庶務掛
中川好昭・二塚伸和

印刷所 有限会社新光印刷
〒606 京都市左京区新堀通
仁王門下る和国町377番地
☎075-751-0355